

九州大学大橋キャンパス演劇部 惑星未虎「限定解除」

「限定解除」とは何か？「異変」とは何か？これらの意味を探しながら、30分を過ぎました。劇中の「やることは一つ。限定解除だ…」というセリフから、「今の自分ではできないこと」や「他者から線引きされている事」を、自らの行動で超えていくという前向きな意味合いだと一旦理解しました。しかし、その後の「自称女性役」「ヴィーガン役」に追い詰められる短いシーンが挿入されたことで、自分や他者が設けた制限を本当に信じて良いのかという疑問を提示されたようにも感じました。ただ、この部分について、免許の限定解除と並べて語るのは少し無理があるように思いましたし、その扱いの軽さも気になりました。

この作品には「限定解除」「異変」「8番出口」「BeReal」「性自認」「ヴィーガン」といった多くの要素が散りばめられており、それぞれに意図があったのだらうと思いますが、結果としては散漫で、作品の真意を受け取り損ねたように感じました。せっかく手元にあるアイディアや問題意識をもう少し、丁寧に扱い作品に編み上げられていたら・・・私も自分に課せられた立場や、超えられない何かと結び付け、より深く作品を理解できたかもしれません。

俳優として印象に残ったのは教官役の彼で、目の表現が丁寧で、コントロールのきいた演技が印象的でした。そして、最後に原付の免許を手にした主人公が「身の丈に合ったサイズの結末」にホッとする姿（と、私には映りました。違う意図だったらすみません）を見て、私は「それでいいのか？しろよ、限定解除！」と背中をバンと押したくなる気持ちが湧き上がりました。この気持ちがかもししたら赤い男の表すものだったのでしょうか？考えすぎでしょうか。

機会があれば是非、ブラッシュアップした「限定解除」を見てみたいです。

西南学院大学演劇部 ふんわりパジャマズ「演劇動物」

「演劇」という言葉と仕組みを、あたまっから見世物としてドンとぶつけてくる面白さと勇気、そして登場した舞台装置の「箱」。つかみの面白さに身を乗り出しましたが、このせっかく面白くなりそうだった設定が、活かしきれていなかったように思いました。

「演劇」として見世物にされるアンとレオの物語を観ているうちに、SNSで誰かの生活や言葉を消費している自分の残酷さをイメージしました。この作品が箱の中と外をもっと明確に切り分けて演出されていたら、見やすかったのではないかと思います。衣装や言葉の運び、演出の手法も均一で、「演劇」であるという構造が薄まっていたように感じました。もし、それが意図されたものであれば、「演劇を見世物にする」という構造ではないどこにフォーカスを絞ろうとしたのか、観客の視線をどこに合わせたかったのか、もう少し示されていたら良かったかもしれません。

可動式の箱が中央に据えられた後、全く動かなかったことや、郵便屋さんが喋り出してしまったことももったいなく感じました。終演後に「しゃべらせることで、ちゃちな作りにしたかった」という（少しニュアンスが違ったらすみません）裏の意図をお聞きしました。だとしたら、その「ちゃちな」が作品の中で何かしらの効果を発揮する為にはもうひとつ工夫が必要だったのかもしれません。

最初のアイディアを最後まで信じて作り上げたバージョンを見てみたかったです。その信じたものが「演劇という虚構を繰り返す我々のちゃちなさ」であっても、もちろん良いと思います。

産業医科大学演劇部 「宵闇アウトサイド」

言葉に出来ない時間。言葉を探す時間。

舞台上にある空白に、ああ、演劇だなーと感じました。

人にはいろんな事情があって、だから簡単に分かるよとか言えなくて。本当の事言ってもいいかな、ひ

かれるかな・・・みたいな、私たち誰もが持っている居心地の悪さを。ゾンビと、吸血鬼と、魔女という・・・しかも、なんか中途半端なゾンビと、吸血鬼と、魔女という設定でうまく魅せるなあ。良い脚本でした。直接的に描かれなかったことで、まっすぐに受け止めることが出来ているのが演劇ならではの。虚構のクッションをうまく使って、大学生のリアルな心情に触れられたような気がしました。

この仕掛けの面白さがあるので、演劇としての嘘と本当のバランスがもう少しずらしてあっても良かったかもしれない、と・・・見てすぐは思いました。ゾンビの手は、やっぱりゴロツと現物が落ちてても良かったかも。(嘘だと分かっててもゾンビの設定が面白いので、あそこまでやるなら、やっぱり見たい。落ちた手を。)逆に、扉の向こうのハロウィンパーティーはもっとリアルに、残酷なほど賑やかな明かりや音が、扉を開ける時にはみ出してきたら・・・そのリアルからはみ出してしまう3人の存在・・・居場所のなさの対比がしっかりと出たのではないかな。

しかし、こうして振り返ると、あれはあれで良かったかも。とも、思います。

役者も、いいなーと思いました。

全国大会までに、さらに磨かれた作品になることを期待しています。

西短 MP 学科椿組「パートタイムスクーリング」

演劇ですから、やはり、大きくても小さくても、何かに向き合っている、葛藤している人間の姿が見たいと思います。この作品の中で沢山の・・・生きづらさ、苦労や悲しみが並べられましたが、どれも会話の中で言葉として伝えられたただけでした。その苦しみの渦中にある、踏ん張っている人間の姿は描かれなかった為、共感するタイミングを失い、置いて行かれたような気持ちになりました。

登場人物たちを愛し損ねてしまった事で、そのあとに続く歌のシーンもいまいち乗り切れなかったというのが私の正直な感想です。

もし、この作品をブラッシュアップする機会があるのなら是非、明け方の店で飲み散らかされたテーブルを片付けるくるみさんの姿、父親からの手紙を見つけて、通夜の会場を飛び出すゆかさんの表情、見てみたいと思う人間の姿が沢山思い浮かびます。

佐賀大学演劇サークル drama!!「バイ・バイ・バースデー」

ちょっと、作品に対して目が近い。と。思いました。

相手役とテンポよく、楽しくセリフのキャッチボールをする楽しさは、私も役者ですのでよく分かります。この作品に登場する、幼馴染のメンバーはそれぞれなんだか可愛らしくて、楽しいやりとりに、一緒に過ごしてきた子供時代を感じる事も出来ました。

でも、少し全体を俯瞰して眺めた時に、その楽しさが作品全体の何を担っているのだろう、観客にどう伝えたいのだろう。そこが弱かったかな、と。思いました。

ペーが蹴っ飛ばす空き缶は、作品において大切な場面だったはずですが。子供時代の自分と今の仲間をつなぐ・・・そしてこの後、町を去ることになるトンビがいつか大人になった時に、この空き缶を蹴っ飛ばす行動が、足に伝わる感触が、倉庫にひびく音が、この仲間との時間を思い出すためのキーになるでしょう。そしてこの作品を見ている観客にとっても、道端に転がってる空き缶を見て、皆さんのお芝居がふっと蘇ったりするかもしれない、もう会えない友達を思い出すかもしれない、そんな印象的なシーンになったはずですが。照明や演技のタイミングがしっかり狙って作られていなかったことが惜しいと感じました。全体としてもっと話し合い、作品の意図を明確にすることで、さらに深みのある作品になったと思います。

今回、既成の戯曲だったということですから、メンバーでもっともっと作品全体の話が出来ていると良かったですね。部員が沢山いるんです！という話も聞きましたし。三人寄れば文殊の知恵です。時間がかかっても、そうやって語り合う時間が演劇の面白いところだと思います。

前半の、ペーが次々と不幸に見舞われるシーンは笑ってしまいました、稽古場は楽しかっただろうなど。

総評

全体的に、作品はいずれも、もっと深く練り上げられる余地があると感じました。そのためには、こうして作品を多くの人に見てもらい、お互いの作品について語り合う経験は必須です。今後も学生演劇祭という素敵な祭りが継続され、それぞれの演劇が磨かれていくきっかけになるといいなと思います。これからの成長と進化を楽しみにしていますし、私も演劇人として考え続け、真摯に表現し続けていきたいと思わせられました。有難うございました。

yum yum cheese! 古賀今日子